

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520624  
 研究課題名（和文） 宗教弾圧がネップ体制成立に及ぼした影響に関する研究  
 研究課題名（英文） Research of influence of repression of Russian church on establishment of NEP system

## 研究代表者

梶川 伸一 (KAJIKAWA SHINICHI)  
 金沢大学・歴史言語文化学系・教授  
 研究者番号：50194733

研究成果の概要（和文）：1922年初頭からはじまるロシア正教会への弾圧はまず、飢餓民に必要な食糧を外国で購入するための貴金属没収の口実ではじまった。このキャンペーンの開始時には、中央委員の多くは必ずしも反教会の強攻策を支持しなかったが、3月半ばのシュヤ事件に対する党中央委員への秘密書簡は党指導部内のこれまでの待機的気分を一掃し、軍事力を動員しての教会と聖職者への容赦のない弾圧と迫害がはじまった。このようにして、宗教弾圧の実施過程でゲー・ペー・ウーにより民衆の抵抗を圧殺するシステムが動き出したのである。

研究成果の概要（英文）：On the beginning of NEP, the war against religion began and this movement proceeded more deeply under the famine of 1921-22. At first many members of Central Committee of communist party dealt with this passively. But in March 1922 a letter referring to Shuya case in which Lenin directed a severe repression of church to members of C.C. changed the atmosphere in C.C. From this moment, a ruthless oppression of church and clergy began and secret letters between leaders of the party determined policy against religion under NEP system. At the same time OGPU organs were introduced to this campaign.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：ソヴェト=ロシア史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ネップ、飢饉、教会弾圧、レーニン、トロツキー

## 1. 研究開始当初の背景

ロシア史学界でも1921年飢饉の研究はようやく始まり、特に地方ではこれに関する「事実の発掘」が精力的に行われている。こ

のとき実施された共産党による教会弾圧に関する研究も同様な事情にある。しかしながら、これらの研究は個別テーマとして扱われ、全体を視野に入れ、これら政策の総体がネッ

プ体制の成立、または、レーニン政治体制とどのような関わりがあるかについては、ほとんど言及されてこなかった。なぜ、1922年初頭に教会弾圧政策が実施されたかという基本的問題にも、明確な回答が出されず、個別の事実関係のみが検討されていたのがこれまでの学界の実情であった。共産党の反民衆的政策の個々の事例が発掘され、解明されたとしても、それをレーニンの支配構造の中で位置づける姿勢は希薄であり、これではネップ体制がソヴェト=ロシア史で持つ意味は従来の解釈から抜け出せないように思われた。ソ連史観が解体された後でも、「レーニン神話」はまだ生き残っている。

これらの個別の事実関係を総合すれば、ネップの根幹の政策が飢餓民への自由な食糧獲得権を与えた自由商業認可の布告からはじまったように、教会弾圧を1921-2年の飢饉と深く絡み合っているのではないかと、また、そこで没収された教会貴重品がその後、1923年から実施される通貨改革の担保になったのではないかと、すなわち、ネップ体制の成立とこの問題は深く関わっていたのではないかと、との仮説を持つに至った。付言すれば、日本での宗教弾圧に関する研究はほとんどなく、あるとしても、まだアーカイヴの利用が不可能な時期の研究であるため、今日から見るといくつかの限界がある。また、教会弾圧と通貨改革を関連させる考察はオリジナルで、この点でも、このテーマは有意味と思えた。

筆者のソヴェト=ロシア史研究の基本的視座は、ボリシェヴィキ権力対ロシア農民であり、ボリシェヴィキの反農民的政策に対する民衆=農民の対応という問題を、一貫したテーマとして扱い、それは十月革命からネップ期までの三部作、『飢餓の革命』、『ボリシェヴィキ権力とロシア農民』、『幻想の革命』で一定の成果を公表し、それらの蓄積に基づき、レーニン時代の反民衆政策の最後となる宗教弾圧をネップとの関連で解明する必要があると思うに至った。

## 2. 研究の目的

本研究テーマは、個別テーマとしてレーニン体制のもっとも象徴的事例を扱うと同時に、この体制の総仕上げともいえるべきテーマでもあり、民衆から精神的にも最後の「過去の遺産」としてのロシア正教を破壊したという、革命的変革運動の最終段階という意味で、ソヴェト=ロシア全体史にも深く関わっているのが特徴である。なぜなら、スターリン政治体制の成立は、宗教弾圧を含めた反民衆的政策に基づくことは、すでに多くの研究蓄積がある。果たして、これらの現象はスターリンの独創であろうか。この源流をレーニン時

代遡らせることは不可能であろうかという、長期的、全体的展望がこのテーマの背景にある。

上述のように、1921年3月から始まるといわれるネップの導入、1921-2年の飢饉、教会弾圧を基軸に、この時代の政治体制と民衆の反応を総合的に捉えることが、本研究の直接の目的である。そして、この時代の政治体制とはレーニンによる支配体制にほかならず、それは同時にレーニン政治体制の本質をも解明するはずである。これまでの研究で、戦時共産主義体制からネップ初期、すなわち、レーニン時代までは政治構造としては、大きな変化はなく、むしろ、政治的には十月革命から続く党中央委政治局の独裁体制は、いわゆるネップ体制下で強化されたように見え、この政治体制が教会弾圧政策の中で、どのように機能したかを検討することも、レーニン政治体制を解明するためには重要な課題であった。このように、十月革命体制からネップ初期体制を歴史通観的に考察することで、そもそも、十月革命とは何であったか、というより根本的問題も明らかにすることもできるであろう。

外国史としてソヴェト=ロシア体制の研究を行うのは、当然のことながら、外国人研究者にとって不利であることは間違いない。地方を含めてアーカイヴ資料が多数開かれている現在、多くの若手研究者はソヴェト=ロシア問題を扱うテーマとして、地域研究や個別研究に特化する傾向がないわけでもない。もちろん、それはしかるべき研究の意義と目的を持つのは事実であるとしても、以下の理由によってこの傾向には与しない。1)地域史や個別研究は、風土、習慣が異なる外国人にとって一般的には不利であり、2)このような研究姿勢は往々にしてアーカイヴ資料に依拠する傾向がある。そして、この傾向は全体史の展望なしに個別事例の特殊事情を強調しがちである。

筆者は外国史研究者にとって有利である点は、外から全体的展望をより俯瞰的に見ることができると考えている。したがって、本研究でもそうだが、つねに個別テーマでありながら、全体史との関わりを意識する必要があると考える。そのように考えれば、本筋はソヴェト=ロシア体制、換言すれば、レーニン支配体制の成立に関わる問題であり、飢饉や教会=宗教弾圧キャンペーンの個別問題を、これとどのように関連させるかが重要であり、繰り返せば、レーニン支配体制の形成過程が最終的な研究目的になるはずである。

## 3. 研究の方法

上述したように、個々の個別事例の分析は

歴史学の手法として重要であることは疑いないが、ここではテーマを分析し細分化するより、できるだけ全体史、少なくとも、十月革命以後、初期ネップに至る社会=政治的状况との関連性の中で考察が必要である。すなわち、個別テーマを全体史へと収斂させる作業が基本的に想定されている。

基本的には、従来から収集してきたモスクワにあるアーカイブ資料の整理と、新たな資料収集である。アーカイブ資料調査には、今回のテーマに関してはモスクワのアーカイブだけでなく、より広く収集する目的で、ニューヨークのコロンビア大学アーカイブ資料の調査も行った。また、モスクワ州で開かれたロシア農民史に関する国際学会にも参加し、さまざまな研究者との具体的情報交換をも行った。

現在のロシア史学界は、上述したように、従来の歴史学の再検討の作業が進行中で、特に、地方においてはさまざまな事実の発掘が行われ、それらのいくつかは資料集という形で公刊されている。しかし、日本で必ずしもそれらが入手できるわけではなく、モスクワの書店で探すなり、国立図書館で調査、コピーなどをする必要がある。

基本的にはアーカイブ資料と文献資料の収集と、読解、検討という従来からの研究姿勢の継続である。

#### 4. 研究成果

このようにして、1922年3月に本格化する、より正確には聖職者を含めた教会弾圧の徹底化は、このとき政治局員にレーニンが出した秘密書簡が契機となったことは、最近の研究によって明らかにされているが、その政治体制の構造は不明瞭のままであった。この間の研究で、次のことが明らかとなった。

1)すでに政策決定過程で党中央委政治局会議が最終的決定権を持つ体制が生まれていたが、この教会弾圧政策の実施過程で、特にレーニンとトロツキーの秘密書簡が出す指示に基づき、秘密に設置された特別委員会が政治局会議の方針を先決するような、大衆からはもちろん、一般党員からも秘匿された政治体制が出現すること。

2)この動きと連動して、十月革命以来、形式的には最高国家機関とされたソヴェト中央執行委の権威が完全に失われた。この役割は、党中央委の決定事項の再確認を行う以上ではなくなった。中央執行委議長カリーニンは形式的には元首であったが、例えば、スターリンの書簡によれば、中央委員でない前者は中央委員である後者に対し、すでに統制権を持っていなかったという。また、先のレーニン秘密書簡では、反教会の指導的役割を果たしたトロツキーを表舞台に出さず、カリー

ニンを前面に押し出すようとの指示があった。まったく虚構と虚偽の政治体制が、このように創り出された。

3)このような政治体制の推進力、実働部隊は22年1月にチェー・カーから改造された内務人民委員部下のゲー・ペー・ウーであった。この時期の民衆運動の鎮圧手段は、戦時共産主義期に常態化された「赤色テロル」であった以上、その担い手であったチェー・カー=ゲー・ペー・ウーがこの後の政策実施過程で重要な役割を果たすのは必然的帰結であった。

これがレーニン時代最後の時期に、彼自身によって構築された支配構造である。

ネップへの移行に関わる問題は、飢饉を含めて、さまざまな要因が影響し合い、ネップ初期の構想は、戦時共産主義期とそれほど大きな隔たりはなかったとする、筆者の旧来からの主張は、シンポジウムや露文発表の論文を通して、ロシア史学界でも徐々に受け入れられているように思える（日本よりむしろロシアの研究者の間で）。2007、09年にモスクワ州コロムナで開かれたロシア農民史に関する国際学会に招待を受け、代表的ロシア農民史研究者の一人、セルゲイ・エシコフはネップ期のロシア農村に関する研究書(Есиков С.Российская деревня в годы нэпа.М.,2010.)で、1章をネップ移行に関する筆者の主張を紹介し、検討していることから判断して、筆者の主張はロシア史学界で一定の評価を受けていると思える。

この成果を受けて、今度は民衆弾圧の常套手段であった「赤色テロル」をキーワードとして、十月革命から初期ネップ、すなわち、レーニン時代の社会=政治史を一貫した流れで描くことが今後の課題となる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 2件)

1. 梶川伸一 「ボリシェヴィキ権力と民衆の悲劇」、東京歴史研究会、2009年3月28日、海員会館(東京)

2. 梶川伸一 Почему был введен нэп. («なぜネップは導入されたのか」)、国立コロムナ教育大学ロシア史ワークショップ主催、2007年10月27日、国立コロムナ教育大学(ロシア)

[図書] (計 3件)

論文集

1. 梶川伸一 Голод и большевистская

власть. // Государственная власть и крестьянство в конце xix — xxi начале века. Коломна. 2009. 117-122 ページ.  
(「飢饉とボリシェヴィキ権力」、ロシア教育省出版、論文集『19世紀末から21世紀初頭の国家権力と農民』、2009年、117-122 ページ.)

2. 梶川伸一 Почему был введен нэп.// Государственная власть и крестьянство в xx — xxi н ачале века. Коломна. 2007. 104-109 ページ.  
(「なぜネップは導入されたのか」、ロシア教育省出版、論文集『20世紀と21世紀初頭の国家権力と農民』、2007年、104-109 ページ.)

翻訳

3. 梶川伸一 社会評論社、セルゲイ・ペトローヴィッチ・メリグーノフ著 『ソヴェト=ロシアにおける赤色テロル(1918~23) レーニン時代の弾圧システム』、翻訳 12-252 ページ、解説論文 253-290 ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

梶川 伸一 (KAJIKAWA SHINICHI)  
金沢大学・歴史言語文化学系・教授  
研究者番号：50194733

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし